九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

夏目漱石『坊ちゃん』における哲学的背景

荒木, 正見
福岡女学院大学 : 教授

https://hdl.handle.net/2324/1683786

出版情報：福岡女学院大学紀要. 9, pp.1-24, 1999-02. 福岡女学院大学
バージョン：
権利関係：

夏目漱石『坊ちゃん』における哲学的背景

荒　木　正　見

「福岡女学院大学紀要」第 9 号抜刷
Fukuoka Jogakuin College Bulletin
1999年 2 月

夏目漱石『坊ちゃん』における哲学的背景

荒　木　正　見

小論は，夏目漱石の評論『文芸の哲学的基礎』(1907) を手がかりにして，小説『坊ちゃん』(1906) を読み解く試みである。特に，『坊ちゃん』の戦いの意味を解読することを軸にして考察を進める。

序.

夏目漱石『坊ちゃん』(明治三九年) は，存外難解な作品である。森田草平『漱石の文学』(社会思想社現代教養文庫，1954／1995) では，「解り易いから万人向き」(『漱石の文学』31頁) とされ，その理由を「無垢で単純な性格」(『漱石の文学』33頁) という坊ちゃんの型通りの性格と，「単純で生一本な坊ちゃんの性格と，複雑で持って廻ったやにっこい世間の常識とを対照」(『漱石の文学』33頁) している作意にあるとしているが，筆者にとってひとつの謎が残る。それは，一見痛快なユーモア小説の様子を見せながら，後述するように，そのエピローグが妙に沈む内容だという点にある。平岡敏夫『「坊ちゃん」の世界』(塙新書，1992) でも，その冒頭から「神経質な漱石」「教師と生徒との断絶」「戦慄すべき何ものか」つまり「啾々たる鬼哭」と，「明るいユーモア」とが共存していると述べられている (13-14頁)。そして，佐藤泰正『夏目漱石論』(筑摩書房，昭和六一年／昭和六二年) では，『坊ちゃん』に触れた章の冒頭から「『坊ちゃん』は，なかなか位置づけのむつかしい作品

である。」(『夏目漱石論』52頁)と記されている。この箇所の意味は，漱石自身の創作歴における位置づけの困難さを述べたものではあるが，同書を貫く直観と卓見の鋭さがこの章でも発揮され，位置づけの困難さの一端は，漱石の，亡き母への思慕を表現した生涯唯一の作品であることに起因していると指摘されている(『夏目漱石論』70頁)。その考察の過程に，『坊ちゃん』の全体の明るさとエピローグの印象との乖離について考察されているのはいうまでもない。

このような，先立つ諸研究に対して，筆者は以下に述べるような仕方を意識して，新たに考察を試みる。

まず，物語としての特徴は，戦いがその表面的なテーマになっているということである。小論では，この，坊ちゃんの戦いの意味の一端を探ることで，難解な『坊ちゃん』の一側面を明らかにするものである。

ところでさらに小論では，次のような特殊な方法を用いる。すなわち，小論では，ひとつの比較論的試みとして，夏目漱石が『坊ちゃん』を発表した翌年，明治四十年四月に東京美術学校で講演し，のちその五月に東京朝日新聞に発表された『文芸の哲学的基礎』との比較検討を行いつつ，『坊ちゃん』における戦いの意味を読み解くことにする。この両作品は時期が接近していることでもあり，おそらくは漱石の深層において相互に反映し合ったことが推察される。一方は，哲学的思考をもとにした文学的創造や思想的立場に関する方法論であり，他方は，具体的に表現された小説であるから，それらは相互に漱石の一側面を立体的に描き出すはずである。

『坊ちゃん』という物語に対する分析の方法は，まずはこのテキストに忠実に読み解くことを軸とするが，特に，主語に対して筆者が勝手に思い巡らせるのではなく，主語を形容し修飾する語や述語を重視し，それらによって作者が主語にどのような性格を与えようとしたのかを探究する。

さらに，小論は比較論の試みとして，文学的本質を守りつつ，隣接の諸学の成果を利用し，その都度，諸学に言及するが，あくまで，文学作品としての『坊ちゃん』に還元しなければならない。

テキストは,『坊ちゃん』については,『漱石全集　第二巻』(岩波書店, 1994, P.247-P.400) を,『文芸の哲学的基礎』については,『漱石全集　第十六巻』(岩波書店, 1995, P.64-P.137) を使用するが, 旧かな, 旧漢字は現代のものに改めた。なお, 両書からの引用は『全集第〇巻』と記す。

また, 外国語文献の引用は拙訳であるが引用頁は原著のものを記した。

一.「小供の時から損ばかりしている」と「意識の連続性」

プロローグにおける書き出しの一行,「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりして居る」(『全集第二巻』249頁) は, レトリックとして考えれば, 第一章 (原著の記述では単に「一」と記されるが, 小論では「第〇章」と記す。) 全体がそうであるように, すでにモチーフである。従って, 例えば岩波文庫版の解説 (平岡敏夫) にこの一行が「主人公の性格と子供時代をよくあらわしている。」(夏目漱石『坊ちゃん』岩波文庫, 1929／1993, 162頁) と述べられることは勿論だが, さらに, この小説のテーマを暗示しているといってよい。

いま, この小説のエピローグを確認すれば, 月給四十円の四国の学校教員を辞して帰京した坊ちゃんは, 月給二十五円の街鉄の技手になっている。金銭的に恵まれなくてももっと幸せになっていればまだしも, 坊ちゃんが唯一全面的な信頼を寄せた下女の清は死んで墓の中という結末なのである。

要するにこの物語は大枠をだけ言えば, 子供の頃から無鉄砲で損ばかりしている坊ちゃんが, 地方のエリートともいうべき教師になったにも関わらず, 無鉄砲な戦いをして, 損な境遇になってしまったという, 単純なものである。

しかし, この最初と最後の状況には, すでに,『文芸の哲学的基礎』に示されるいくつかの重要な概念が反映しているので, まず, その諸概念を確認する。

『文芸の哲学的基礎』において, はじめの重要な概念は「意識の連続」である。「只 (ただ) 明かに存在して居るのは意識であります。そうして此意識の

連続を称して俗に命（いのち）というのであります。」（『全集第十六巻』71頁）や「とに角意識がある。物もない，我もないかもしれないが意識丈（だけ）は慥（たしか）にある。そうして此意識が連続する。」（『全集第十六巻』72頁）と述べられるように，漱石は，デカルトのコギトに類すべき，意識を実在の根底に据え，その意識が連続しているとする。しかもこの意識の連続を生命だとする。

そこから文学表現の方法へと展開するが，その問題はまずはおおまかに「如何なる内容の意識を如何なる順序に連続させるかの問題」（『全集第十六巻』76頁）と述べられることになる。

ここから，『坊ちゃん』のプロローグとエピローグとを考えれば，いくつかの要点が指摘できる。

まずは創作において常識的なプロローグのモチーフと，エピローグに至る事態との連続性が，『坊ちゃん』の場合はさらに強く「意識の連続性」として記されているのではないかということである。すなわち，内容において「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかり」していることが，創作者の意識にずっと連続して，最後の寂寥感に至ったと解することができる。

次に，この作品が記される架空の時点の問題である。この作品は，いわば回顧談である。すなわち，この小説における現在は，「だから清の墓は小日向の養源寺にある。」（『全集第二巻』400頁）という最後にある。そのことは，この清の死がすでに冒頭の一節に暗示されていることからも明らかである。「此三円は何に使ったか忘れて仕舞しまった。今に返すよと云ったぎり，帰さない。今となっては十倍にして帰してやりたくても帰せない。」（『全集第二巻』254頁）がその箇所である。現在に過去が重層的に集約するこの手法は，「意識の連続性」を前提にしなければ成立しない。

このことをもう少し正確に説明するために，「時間の連続性」について確認する。

『文芸の哲学的基礎』においては，「意識の連続は是非共記憶を含んでおらねばならず，記憶というと是非共時間を含んで来なければならなくなりま

す。」（『全集第十六巻』77頁）と述べられ，続いて，「時間と云うものは内容のある意識の連続を待って始めて云うべき事」（『全集第十六巻』77頁）と述べられるように，夏目漱石は時間をカイロスすなわち質的時間，もしくは内的時間と捉える立場に立つが，それゆえに，意識の連続性の中に時間を含んで，瞬間的に過ぎ去っていくクロノスすなわち量的時間ではなく，質的な時間のふくらみの中に物語を集約するのである。換言すれば，「記憶」に言及するように，「意識の連続性」は，刻々と，時計のように過ぎていく時間ごとに事柄を過去へと忘却していては成り立たない。それは，あくまで，刻々と過ぎようとする事柄をある時間の幅の中での記憶にとどめて初めて成立する概念なのである。

この点から考えれば，『坊ちゃん』は時間を質的に捉え，そこに作者なりの思いをこめていると想像される。すなわち，プロローグとエピローグの間に入る，「四国辺のある中学校」（『全集第二巻』258頁）での冒険談の箇所が，実際には短期間であったにも関わらず，この物語の中で最も重要で面白く量も圧倒的に多いことが，この時間の質的把握すなわちカイロスから生じた「時間の連続性」によることだと理解される。

このように「意識の連続性」はすでに，『坊ちゃん』を読み解くための重要な手がかりを提供するが，それは単に，「時間の連続性」へと展開するのみではない。『文芸の哲学的基礎』では次のように展開し纏められている。

まず，「(一)（中略）意識には連続的傾向がある」（『全集第十六巻』81頁）と，原則が述べられる。すなわち，意識は時計のように瞬間瞬間の現在を過ぎていくのではなく，幾分かの連続的な幅をもって過ぎていくものだというのである。

次に，「(二) 此傾向が選択を生じる」（『全集第十六巻』81頁）とされるが，これは，「如何なる内容の意識を如何なる順序に連続させるか」（『全集第十六巻』76頁）という選択を意味する。すなわち，意識が幾分かの連続的な幅を持つというのは，意識に現れる事柄が連続的な同一性を有することを意味する。何をもって連続的な同一性と見なすかは，自覚するかしないかは別にし

ても，意識が選択することであり，これを小論では「意識の選択性」と呼ぶ。

次に，「(三) 選択が理想を孕む」(『全集第十六巻』81頁) とされる。これは，意識の選択の背後には，意識自身の理想を前提としている，ということを意味している。

次に，「(四) (中略) 此理想を実現して意識が特殊なる連続的方向を取る」(『全集第十六巻』81頁) とされるが，これは，選択の働きによって意識に特殊な事柄が生じることを意味する。意識が連続しているからこそ，事柄が意識上においてその同一性を保ち得るのである。

次に，「(五) 其結果として意識が分化する，明瞭になる，統一せられる」(『全集第十六巻』81頁) とされる。これは，意識における事柄の成立を意識の側から述べているといえる。すなわち，意識上に事柄が成立するということは，それまで曖昧であったひとつの意識が具体的な姿へと区別され，はっきりした姿をとり，統一的な姿を示すことになるのである。

次に，「(六) 一定の関係を統一して時間に客観的存在を与える」(『全集第十六巻』81頁) とされる。ここでは，先に現れてきた事柄をもう一度反省して，それらの事柄を関係づけ，その関係づける概念のひとつとして，時間という事柄を成立させ，それに客観的性格を与えるのである。

次に，「(七) 一定の関係を統一して空間に客観的存在を与える」(『全集第十六巻』81頁) というのも，時間の場合と同様である。この時間と空間の概念がどのように導かれたのか，という疑問も生じるが，それはあくまで，例えばカントのカテゴリーにおいて，我々の日常的な認識における最も根本的な概念とされるように，我々が経験的に持っている根本的な概念だというしかない。もちろんこれは，後述するように，夏目漱石自身の創作過程に彼自身が強く意識している概念でもある。

次に，「(八) 時間，空間を有意義ならしむる為に数 (すう) を抽象して之を使用する」(『全集第十六巻』81頁) とされるのは，時間と空間によって織り成される世界においては，数量化によってその状態を確認することを意味している。

最後に，「(九) 時間内に起る一定の連続を統一して因果の名を附して，因果の法則を抽象する」(『全集第十六巻』81頁) とされる。これは，事柄相互が連続的統一として捉えられる場合には，因果関係があるとすることを意味している。この因果関係の成立と，それを成立させたい理想とが密接な関係を持つことはいうまでもない。

かくして，夏目漱石は，事柄一般や時間，空間の成立，そして，数や因果関係の成立までも，意識の連続性や意識の選択性を軸として，展開する。それが，創作の方法と繋がっていることはいうまでもない。そして，創作の方法を考えるというのであれば，先に列記した中では，(四)が重要な意味を持つ。すなわち，創作者が前提とする理想によって，事柄も，作品も独特の姿を持つことになる。その理想は，文学表現を遂行する創作者の場合，次の四つだとされる。

まず「一が感覚物そのものに対する情緒 (其代表は美的理想)」(『全集第十六巻』81頁) と「二が感覚物を通じて知，情，意の三作用が働く場合」(『全集第十六巻』81頁) との二つに分けられる。そして後者は「(い) 知の働く場合 (代表は真に対する理想) (ろ) 情の働く場合 (代表は愛に対する理想及び道義に対する理想) (は) 意志の働く場合 (代表は荘厳に対する理想)」(『全集第十六巻』81頁) だとされるのである。

さらに，夏目漱石は「これら四種の理想は，互に平等な権利を有して，相冒すべからざる標準」(『全集第十六巻』101頁) と，相互の調和を重視するのである。

では，このような夏目漱石の文学的方法論は，『坊ちゃん』にどのように現れているのか。次章では，『坊ちゃん』に沿って，それを明らかにする。なお，『文芸の哲学的基礎』の上記の諸概念については随時言及することになるが，その場合，(一) ～(九)，(い) ～(は) の記号を利用する。

二．坊ちゃんの戦い

小説『坊ちゃん』は，坊ちゃんの戦いをテーマにしていることはいうまでもない。幾分未熟で一本気な敵愾心が，至るところに向けられているのが，ユーモア小説たる所以でもある。ここでは考察の軸として，その敵愾心の向けられる相手と，その敵愾心の内容について，テキストに沿って確認しつつ，先の諸概念の具体的実現について考察する。

第二章は，坊ちゃんが四国辺（へん）のある中学校に赴任したことが記される。

まず，「人を馬鹿にしていらあ，こんな所に我慢が出来るものか」（『全集第二巻』261頁）と，田舎に対する敵愾心を発揮する。船頭の様子も，町人も，学校もどこか間が抜けていて，坊ちゃんには合わない。

次に，宿の態度に対して「失敬な奴だ。嘘をつきあがった。」（『全集第二巻』262頁）と，金儲けのみを基準とするその小賢さと小ずるさと宿の待遇に腹を立てる。

学校では，校長（狸）をはじめとする学校行事に関する，形式主義に抵抗する。教員に対しては，教頭（赤シャツ）の，健康を理由とする赤シャツに西洋かぶれに対するような反感を抱き，英語の古賀（うらなり）の不健康な感じを嫌がり，数学の堀田（山嵐）の荒々しさに反発し，きざな画学の教師を馬鹿にする。しかし，「愛敬のある御爺さん」（『全集第二巻』267頁）である漢学の教師には，見下しながらも少しは好感も持ち，下宿を世話してくれる山嵐に対しても見直すのである。

すなわち，ここで坊ちゃんが敵愾心を燃やすのは，（a）田舎という場所に対して，（b）形式主義に対して，（c）目立った行為や状態に対して，（d）目先の金儲け主義や小ずるさに対して，などである。

（a）については，（七）に述べられるように，空間に客観的存在を与え，

それに，この小説特有の意味づけをしようとする試みである。もちろんそこには，（三）（四）（五）に述べられるように，意識の連続性のなかで選択され，分化し統一性を与えられ，独特に観念化される田舎があるし，逆に，理想化される東京がある。そこには当然，文化的な差が意識されている。それは，一方では，間抜けな感じという，未発達さを示すのではあるが，他方では，（d）の金儲け主義という，むしろ都会から伝染してきたはずの傾向性も示す。そして，第一章のモチーフを思い起こし（八）で述べられた数の抽象を考慮に入れて考えれば，坊ちゃんの東京での生活は月給が激減したのであるから，東京でのこの金儲け主義に破れたともいえるのである。そこから考えれば，この土地に足を踏み入れたこの第二章は，すでに，坊ちゃんの戦いの本質を示唆しているともいえるが，それについては後述する。

（b）についても，やはり（三）（四）（五）に述べられるように，意識の連続性のなかで，選択的に分化し統一性を与えられ，独特に観念化される形式主義がある。これに対するのは，そのような形式主義を否定して，自由奔放に，自分が思うままにふるまう生き方である。ただし，それが第一章でモチーフとされた「無鉄砲」に繋がることは，記憶しておく必要がある。

（c）については，のちに，完全に肯定するわけではないが，やや修正される。山嵐については，すぐに好感を持つし，うらなりについては同情もする。さらに好悪を分類してみると，（a）における文化的対立の考察と類似的に考えることができる。すなわち，赤シャツに代表される西洋の影響や，東京ぶった画学教師に反感を感じるし，いっそ古くさい漢学の教師には，少し見下しながらも好感を持つのである。ここで暗示的に述べられているのは，近代批判であると予測される。

以下これらがどのように展開するのかを辿る。

第三章では，生徒との諍いと，下宿の亭主の骨董攻めに辟易する。いずれも，（a）の田舎という場所に対する敵愾心に関係する。

生徒の場合，「何だか敵地へ乗り込むよう」（『全集第二巻』271頁）という

感じは，新任の教師として分からないではないが，坊ちゃんの場合，それは，やはり「江戸っ子」対「田舎者」という構図である。天麩羅蕎麦の事件も「冗談も度を過ごせばいたずらだ。焼餅の黒焦のようなもので誰も賞め手はない。田舎者は此呼吸が分からないからどこ迄押して行っても構わないと云う了見だろう。一時間あるくと見物する町もないような狭い都に住んで，外に何にも芸がないから，天麩羅事件を日露戦争の様に触れちらかすんだろう。憐れな奴らだ。小供の時から，こんなに教育されるから，いやにひねっこびた，植木鉢の楓見たような小人が出来るんだ。」（『全集第二巻』277頁）と，（d）の小ずるさをも挙げて，もっぱら田舎者であることをこきおろしている。そして「わざわざ東京から，こんな奴を教えに来たのかと思ったら情けなくなった。」（『全集第二巻』277頁）と，東京者を引き合いにして嘆くのである。団子事件，赤手拭い事件，温泉水泳事件，いずれもが「何でこんな狭苦しい鼻の先がつかえるような所へ来たのかと思うと情なくなった。」（『全集第二巻』279頁）と，田舎に来たことを情けなく思うのである。これらすべてが（d）に関することだということはいうまでもない。

その中で特に温泉に関しては，（七）の空間に客観的存在を与える手法を用いている。すなわち，東京対田舎という図式の中で，坊ちゃんにとって田舎は，敵であり嫌悪すべき場所であり，緊張の抜けない場所であるが，いま，その田舎町の外に温泉を置けば，温泉という客観的意味合いからは緊張をほぐすことのできる場所だという印象を与える。そうしておいて逆にその温泉でさえ坊ちゃんにとって気楽な場所ではないのである。

同様に，骨董攻めにする宿の亭主に対しても（d）の小ずるい田舎者という図式で嫌悪する。ここにも，東京対田舎という構図が示される。

（b）の形式主義に関しても，「三時過迄学校にいさせるのは愚だぜ」（『全集第二巻』272-273頁）と反発する。

ところで，（c）の目立った行為に関しては，目立つことの愚に関しては，むしろ坊ちゃん自身がその行為をとっていることを記している。列記された事件は，実はすべて目立つ行為に当たる。そこには，素朴で単純な坊ちゃん

の姿もあるが，先の赤シャツに類した紅色に見える「西洋手拭い」を汽車に乗って温泉に往復する間中ぶらさげている坊ちゃんの姿に同時に重ねているのは，きざな西洋かぶれであり，やはり近代批判を示唆しているといえる。客観的叙述者夏目漱石は，ここにも坊ちゃんの運命を示唆しているといえる。このことは改めて後述する。

第四章は，宿直のバッタ事件である。宿直にもかかわらず，温泉に行き，狸校長に嫌みを言われる件に関しては，（b）の形式主義に対する反発だし，寝具にバッタの群れを放たれて，学生たちと悶着を起こす件は，（a）や（d）に関して，（七）を考慮しての，田舎という場所に対する反発を増長させる。

第五章は，赤シャツと野だいこに誘われた釣りの一件である。きざな赤シャツと太鼓持ちの野だいこに辟易し反発するのはいうまでもないが，それが海上というのは，（七）を考慮してのことだといえる。「甚だ愉快だ」（『全集第二巻』294頁）と，坊ちゃんは海そのものには，田舎町と比して好感を持つ。それだけに，赤シャツと野だいこの二人の言動には，ことごとく反発する。この対立が坊ちゃんの心理を浮かび上がらせる。そのまとめとして，「考えて見ると世間の大部分の人はわるくなる事を奨励して居る様に思う。わるくならなければ社会に成功はしないものと信じて居るらしい。たまに正直な純粋な人を見ると，坊ちゃんだの小僧だのと難癖をつけて軽蔑する。（中略）単純や真率が笑われる世の中じゃ仕様がない。」（『全集第二巻』303-304頁）と述べる。これは（c）の目立った行為に対する批判であり，（d）にも通じるとりわけ痛烈な近代批判である。（七）に関して，空間を意識して読めば，穏やかで素朴に広がる海の上に，その海を掻き回したり，「此赤シャツはわるい癖だ。誰を捕まえても片仮名の唐人の名を並べたがる」（『全集第二巻』297頁）という調子で，西洋かぶれの話題を振りかざす人間が漂っている対比が見える。そこにことさらに厳しい近代批判が示される。

辺のある中学校から，日向の延岡に転勤するのだが，坊ちゃんによると延岡は散々にけなされる。「知らぬ他国へ苦労を求めに出る。夫も花の都の電車が通ってる所なら，まだしもだが，日向の延岡とは何の事だ。おれは，船つきのいい此所へ来てさえ，一カ月立たないうちにもう帰りたくなった。延岡と云えば山の中も山の中も大変な山の中だ。(中略)名前を聞いてさえ，開けた所とは思えない。猿と人とが半々に住んでるような気がする。いかに聖人のうらなり君だって，好んで猿の相手になりたくもないだろうに，何という物数寄だ。」(『全集第二巻』345頁）と，延岡の人が聞いたら腹を立てること間違いないと思われるほどのけなしようである。ここでは，延岡が四国辺のこの土地よりはもっと（a）の田舎性を有するのではないかと強調し，東京―四国辺―延岡と結ぶ空間対比を明確にすることで，うらなりの古賀の不遇さが強調されるのである。

第九章は，うらなりの送別会である。この小説のクライマックスでもある次章の師範学校生との大立ち回りの前哨戦として，山嵐との和解，狸校長や赤シャツに対する嫌み，野だいこをぽかりとやる件などが列記される。

ところでここにも（七）に発する空間的対比が示される。まずは，坊ちゃんの出身の東京，すなわち江戸と，山嵐の会津である。
相互に「江戸っ子か，道理で負け惜みが強いと思った」(『全集第二巻』354頁）や「会津っぽか，強情な訳だ」(『全集第二巻』355頁）と応酬するが，実はここではそのことで相互に親近感を抱く場面である。これが「東京っ子と福島っ子」などではなく「江戸っ子と会津っぽ」だというのがこの箇所での「負け惜しみ」「強情」との形容にふさわしい。そして，狸校長，赤シャツ，野だいことの対決という構図に独特の意味を添えるのである。すなわち，江戸と会津は，明治の新政府からすれば，旧勢力である。幕府の江戸は当然だが，戊辰戦争で最期まで戦った会津も旧勢力の典型と見なされている。明治維新を遂行した勢力が，文明開化と称して着々と西欧文明を取り入れようとしている時代背景の中で，考え方としては置き去りにされようとしている「江戸」

と「会津」が意気投合したのがこの箇所なのである。

もうひとつの空間対比は，この土地と，古賀が赴任する延岡である。延岡については，先の記述ではさんざんけなしたようにみえたが，ここではやや風向きが変わる。そして，以下の，山嵐が古賀に手向ける挨拶に，坊ちゃんの戦いにおいて守りたいものが示唆されている。

「延岡は僻遠の地で，当地に比べたら物質上の不便はあるだろう。が，聞く所によれば風俗の頗る淳朴な所で，職員生徒悉く上代樸直の気風を帯びているそうである。心にもない御世辞を振り蒔いたり，美しい顔をして君子を陥れたりするハイカラ野郎は一人もないと信ずるからして，君の如き温良篤厚の士は必ずその地方一般の歓迎を受けられるに相違ない。」（『全集第二巻』360-361頁）

すなわち，ここで排せられるのは，「ハイカラ野郎」である。「心にもない御世辞を振り蒔いたり，美しい顔をして君子を陥れたりする」のは必ずしも「ハイカラ野郎」とは限らないのだが，ここで同義に結びつけられているところに，作者の文明批判の意図が見える。そして，守られるのは，「淳朴」であり「上代樸直の気風」であり「温良篤厚」である。作者としては，「物質上の不便」はあっても，これらを守りたいのである。この思考が（b）（c）を意識してのことだというのはいうまでもない。

このような，思想とも言うべき作者の意図を，特定の空間の統一的意味に与えている。これは空間一般の持続性から選択的に生じた特定の空間の統一的意味という特定の持続性に委ねる手法である。

第十章は，日露戦争祝勝会と，山嵐との赤シャツ退治の相談と，師範学校生との大立ち回りの一件である。

祝勝会の儀式に関しても，（b）の形式主義批判とも関連して，散々に批判している。

また，この章で山嵐とともに戦った相手は師範学校生であり，「資格からいうと師範学校の方が上だそうだ」（『全集第二巻』371頁）とされるように土地

のエリートである。しかも，この戦いに山嵐と坊ちゃんを扇動したのは赤シャツの弟であり，次章で明かになるように，これは山嵐を追放するための赤シャツの謀略であった。従って，この戦いは坊ちゃんとこの土地全体との戦いを象徴している。すなわち，中学の生徒―師範学校生―狸校長や赤シャツというこの土地の特徴を担ったものの系列が想定され，坊ちゃんはこの系列の下から順に戦いをしていることなる。そして，この系列のパラメーター，すなわち統一的意識のひとつが，(七)に発する，この土地そのもの，土地柄である。土地柄に対する反発についてはこれまでも散々述べられてきたが，この章でもそれは次のように徹底的に述べられる。

「商人が頭許（ばかり）さげて，狡い事をやめないのと一般で生徒も謝罪丈はするが，いたずらは決してやめるものでない。よく考えて見ると世の中はみんな此生徒の様なものから成立して居るかもしれない。人があやまったり詫びたりするのを，真面目に受けて勘弁するのは正直過ぎる馬鹿と云うんだろう。(中略)もし本当にあやまらせる気なら，本当に後悔する迄叩きつけなくてはいけない。(中略)こんな卑劣な根性は封建時代から，養成した此土地の習慣なんだから，いくら云って聞かしたって，教えてやったって，到底直りっこない。」(『全集第二巻』369-370頁)

この引用では，土地柄について批判するとともに，それを（d）の金儲け主義に絡んで「世の中」一般についても敷衍している。このことは『坊ちゃん』に一貫している。

第十一章は終章でもあり，エピローグとしてすべてが決着することになる。

決着の第一は，坊ちゃんと山嵐の辞任である。狸校長は，師範学校生との騒動の責任を山嵐にだけ押しつけようとするが，坊ちゃんは自分も同罪だと断固辞任を主張する。履歴に傷がつくという狸に対して「履歴より義理が大切です」(『全集第二巻』390頁）と言い放つのである。ここには，これまでと同様（四）の意識の特殊な連続的方向性と（五）の意識の分化と統一という経緯に基づいた作者の思想の一端が示される。「義理人情」がその思想である

が，これは，この作品を貫く統一的思想だということはいうまでもない。

決着の第二は，赤シャツと野だいこに対する制裁である。赤シャツがなじみの芸者と会う現場を押さえてやっつけるという計画は，宿に潜伏すること八日目にして実行される。盗聴すれば，山嵐の辞任は「邪魔者」と呼ばれるように明かに彼らの謀略であり，坊ちゃんは「勇み肌の坊ちゃん」と馬鹿にされる。「いくら言葉巧みに弁解が立っても正義は許さんぞ」（『全集第二巻』398頁）と，卵をぶつけぽかんぽかんと殴る。これは，先の「義理人情」の具体的な発現である。

決着の第三は，坊ちゃんのその後である。山嵐とはすぐわかれたきり会う機会はないし，職は月給が二十五円というかつての四十円よりはかなりの減収で街鉄の技手になる。清はしばらく一緒に暮らしてから死んでしまう。正義をふりかざした痛快な戦いのあとにしては，その末路は妙に寂しい。しかし（四）の意識の連続的方向と（五）の統一ということを考えれば，これも「義理人情」の延長線上にあることは間違いはない。そして，この矛盾にこそ，坊ちゃんの戦いの真の意味が存在するはずである。

次節ではそれを考察する。

三．W．ジェイムスと坊ちゃんの思想

『文芸の哲学的基礎』に示されるように，夏目漱石は意識の連続性と，その連続的意識上に意識の選択性によって統一的に現れる特殊な諸概念との連続性とを意識して創作している。これが哲学的思想である以上，単なる技法を超える一面があることは当然だが，ここではまず，それを技法として受け止め，具体的な展開を振り返ってこの作品における戦いの意味を考察する。

一．で述べたように，『坊ちゃん』のプロローグとエピローグとを貫く意識の連続性が指摘される。それは「無鉄砲で損ばかりしている」という寂しい事実だが，これが小説の全体の基底を貫いていることは，すでに確認してきた通りである。

まず連続性については,「感覚的な生を具体的に観察したものは誰でも，あらゆる種類の関係が，時間の，空間の，差異の，類似の，変化の，速度の，原因の，その他もろもろの関係が，項（term）と同様に，まさに感覚的な流れの欠くことのできない一員と知るはずだし，接続的関係が，分離的な関係と同様に，まさに感覚的な流れの真の一員だと知るはずである。」(William James "Essays in Radical Empiricism and A Pluralistic Universe" E.P. Dutton, 1971, P.254）とされるように，感覚的な流れは個々の項，もしくは概念や言葉が連続的に示されるだけではなく，それらの関係によって，むしろ関係によってこそ流れとして成り立っていると述べられている。

さらに,「内的生の脈動（pulse of inner life）においては，少しの過去と，少しの未来と，我々の身体や，他の人々や，我々がそれについて語ろうとしている崇高さや，地球の地理や歴史の方向や，真や偽や，善や悪や，誰がもっと沢山のことを知っているのかなどについての，少しばかりの意識（awareness)が，我々のそれぞれにおいて今，直接的に存在している。」("Essays in Radical Empiricism and A Pluralistic Universe" P.258）とされるように，意識の流れは時計の一瞬一瞬におけるように途切れているのではなく，時間空間のすべて，知識や価値に関するすべてなどによってある連続的なふくらみを持っているとされる。

これまで述べられてきた意識の連続性は，漱石における意識の連続性，すなわち（一）と同じ意味を持つ。そして，このような意識の連続性の中で，ある事柄が成立することについては，次のように展開される。

まず,「我々は過ぎ行く時間を満たしている材料(matter)においても，同じ一者における多を持っている。」("Essays in Radical Empiricism and A Pluralistic Universe" P.256)，すなわち，過ぎ行く時間の中に存在する一者も，確固たる一者ではなく，多という変化の兆しを持っているとされる。それをさらに,「我々の思考の縁からあふれ出るような思考の突進が，思考の生の変わることなき特異性である。」("Essays in Radical Empiricism and A Pluralistic Universe" P.256) と，思考はいつも自分自身を超えようとしてい

るとし，それが思考の生であるとして，多という変化の兆しもこの思考の生に委ねられるのである。さらにこの生は，「我々はこの生を，常にバランスを失っているものとして，推移の状態にあるものとして，闇から夜明けを通って，夜明けが満たされると我々が感じる明るさへと突き進むものとして，実感している。」（"Essays in Radical Empiricism and A Pluralistic Universe" P.256）とされるように，意識の縁を，動きを持ち，漸次意識の明るみへともたらされるものとして立体的に理解するとされる。その上で「連続性の真っただ中において，我々の経験は変化として現れる。」（"Essays in Radical Empiricism and A Pluralistic Universe" P.256）と，連続性は変化の連続性でもあることを述べる。ここまではまだ，意識の連続性と意識に現れる変化をのみ述べているのだが，このような連続において，特定の事柄が成立することに関しては次のように述べられる。

まず，「感覚のあらゆるクレッシェンドにおいて，あらゆる思い出そうとする努力において，欲望の満足へと向かうあらゆる過程において，互いに影響し合い，一体である空虚と充実の継起が現象の本質である。」（"Essays in Radical Empiricism and A Pluralistic Universe" P.256）と述べるように，知的欲望や感覚が高揚するところに，現象すなわち事柄の成立があるとされる。

そしてさらに，「すべて欲望が妨げられることにおいて，実際には存在しない（absent）理想の存在（ideal presence）の感覚が，つまり，［意味すること］が存在するための唯一の機能であるような存在しない理想の存在の感覚が，いっそうはっきりしてくる。」（"Essays in Radical Empiricism and A Pluralistic Universe" P.256-257）と述べられ，意味，すなわち意味を担う概念の成立が，欲望充足に発した理想にあるとするのである。

以上のW．ジェイムスの展開を纏めたものが，漱石の（二）から（五）に至る展開だといえる。特に漱石が事柄の成立を（四）で「理想の実現」と述べたことは，特異的な類比である。

このように，夏目漱石はW．ジェイムスの思想を自分なりに受容して，創

作の方法へと取り入れているといえるが，さらに重要なのは，このW．ジェイムスの理論的展開が，主知主義(intellectualism)に対する批判でもあるという点である。

W．ジェイムスが主知主義に対して行う批判の要点は，その思考に内在する断絶性にある。彼によれば，主知主義の言う理性的因果性は，「すると，原理的には，我々が直接に感じる生の単位は，主知主義的な論理が提出し，それによって計算している単位とは似ていない」("Essays in Radical Empiricism and A Pluralistic Universe" P.258) と述べられるように，ばらばらに断絶している相互の事柄の純粋性にのみ目を向けて抽象的に設けるようなものだという。それは意識が，バークリーの観念論や，ライプニッツの窓の無いモナドのような，自分に閉じこもった意識ではないということを意味している。先の意識の流れを構造的に述べれば，「私の現在の意識野 (field of consciousness) は，次第に潜在意識 (subconscious) へと移っていく周辺に囲まれた中心」("Essays in Radical Empiricism and A Pluralistic Universe" P.259)とされるように，自覚的な意識を，無自覚的な無意識と連続的に捉え，その因果性も必ずしも総ては認識できない，まして理性的には認識できず，ただ感じるだけという連続性として捉えるのである。

このように意識の連続性が，単に創作技法の問題ではなく，思想的にも主知主義批判という側面をも有しているということになれば，その思想が『坊ちゃん』に反映している可能性も考えなければならない。

いま，坊ちゃんの戦いを振り返る時，その戦いが明治という時代の西洋文明の未熟な導入に向けられたことはすでに述べた。それを哲学的に抽象したレベルで言えば，連続性と断絶性との戦いであったということにもなる。

すなわち，坊ちゃんは「負け惜しみ」や「強情」の江戸や会津の保守的連続性を愛し，「淳朴」であり「上代樸直の気風」であり「温良篤厚」である延岡の伝統的連続的な純朴さを評価するのである。また，「履歴」による出世という近代の出世主義に対して「義理」という古来連続してきた生き方を重んじる。

そしてこれらに対して，目先の金儲け主義や経済優先，出世優先の考え方は，それらの伝統的連続性を破って西洋文明とともに突然導入されてきたものという含みがある。金儲け，出世などは，それまでの自分の生き方を超えるところに成立する。それは，それまでの調和の否定だといってもよい。先に『文芸の哲学的基礎』で触れたように，連続性の考察から派生した（い）～(は)の四種の理想が相互に調和することを重視する漱石にとっては，それらの調和を乱すことは本意ではない。しかし，漱石にとって文明開化は，生活や経済活動すべてにわたって，それまで歴史的に連続してきた調和を一気に断ち切ることを要求しているように見えたのである。

結び.

このように，坊ちゃんは連続を重んじる思想をもって，断絶的な明治の風潮と戦って破れた。この敗退については，作者漱石自身の，冷静な時代考察があったと言わなければならない。

平川祐弘『夏目漱石　非西洋の苦闘』（講談社学術文庫，1991／1993)では，初めに漱石の『クレイグ先生』に対する分析を通して，また，クレイグ先生という暖かい人柄と漱石との交流を対比させつつ，若き漱石のイギリス留学中に形作られた西洋文明に対する批判的視点を明かにし，それらの考察を下敷きにしつつ，同書の後の箇所で「漱石には『猫』中の会話にもあったように，二十世紀の文明社会がますます住みづらい世の中になるという予感があった」(『夏目漱石　非西洋の苦闘』350頁）と，漱石の西洋批判的一面が述べられている。しかし，漱石の冷静な時代考察というのはそれにとどまらない。同書でも「その文明の進歩がいまやその中に日本人をも包み込んで，不可避的に進行中であるという認識もあった」(『夏目漱石　非西洋の苦闘』349頁）とも述べられる。

これは，磯田光一「漱石と二十世紀」(三好行雄・平岡敏夫・平川祐弘・江藤淳編『講座　夏目漱石　第四巻』有斐閣，昭和57年）で，開化を批判しつ

つも欠くべからざるとする漱石の言葉を引用しつつ，この近代化のジレンマこそが漱石の思想的な先駆性であるとされていることと一致する(『講座　夏目漱石　第四巻』10頁)。

いま『坊ちゃん』を振り返れば，第三章で坊ちゃんは，赤シャツの西洋かぶれを批判しつつも，自分も西洋手拭いをぶら下げて汽車に乗るのである。

だからこそ坊ちゃんの戦いは最終的に敗退しなければならなかったのである。このように，連続と断絶の狭間で戦う坊ちゃんの姿は，現代においても一層の近代化の狭間で戦う我々自身の姿でもあるといえよう。

最後に，小論の考察に連なる次に考察すべき問題点を列記する。すなわち，小論が文学的方法論に言及するものである以上，方法論に関して次の二点を考察しなければならない。その一は，「連続性」「選択性」を考慮したこの方法は文学史上どのような意義を持つのか，という問題である。その二は，その方法の『坊ちゃん』への適用において，また，他の諸作品への適用において一律に成功しているのかどうかという問題である。これらの問題は機会を改めて論じる。

参考文献一覧

『漱石全集　第二巻』岩波書店，1994.
『漱石全集　第十六巻』岩波書店，1995.
森田草平『漱石の文学』社会思想社現代教養文庫，1954／1995.
平岡敏夫『「坊ちゃん」の世界』塙新書，1992.
佐藤泰正『夏目漱石論』筑摩書房，昭和六一年／昭和六二年.
夏目漱石『坊ちゃん』岩波文庫，1929／1993.
小倉脩三「漱石におけるウィリアム・ジェームズの受容について　一坑夫の周辺をめぐって一」(『日本文学研究資料叢書　夏目漱石Ⅲ』有精堂出版，1985／1989).
William James "Essays in Radical Empiricism and A Pluralistic Universe" E.P. Dutton, 1971.
平川祐弘『夏目漱石　非西洋の苦闘』講談社学術文庫，1991／1993.
磯田光一「漱石と二十世紀」(三好行雄・平岡敏夫・平川祐弘・江藤淳編『講座　夏目漱石第四巻』有斐閣，昭和57年)